

二百加印 蚊遣火て読むや芳機か筆の跡

卷頭

二百 奉納を拝む鏡のうらの梅

思はぬ人に廻り合けり  
百八十 かわくとも牛に吞せぬ花の瀧

二百 芋洗ふ女も撫る銀の猫

二百 病床に上懐炉の脉をけり

曲り <sup>アガ</sup>□<sub>ヒ</sub>りけり

百八十 松島の松おのづから

二百 月の輪形りの海海老

二百加印 直諫に身か蝸牛

百八十 西綫掛る古泥障

百八十 首陽の山の瘦七蕨

二百 ふる蚊屋着する雪の宿

百八十 雪に寐悪ひ堂泊<sub>泊り</sub>り

二百加印 搦手に出る繩手道

二百加印 不思議見けり越す七峠

百八十 銀河<sub>河</sub>に掛る虹の橋

百八十 霜打殺す種子生業

二百 虎杖竹の根を、ぢ

二百 稲妻のかき目にかゝり

二百 壁に錠卸すかき蕨

百八十 鮮雑魚<sub>アミザコ</sub>壳の尉と姥

二百加印 繩かけられし作梅

ㄥ  
(8・オ)

ㄥ  
(ウ)

ㄥ  
(7・オ)

ㄥ  
(裏表紙)

百八十 山出も花の姿や伊勢詣テ  
 百七十 武蔵野も春に香りし家の花  
 百八十 沓音の闇□渡るや踏歌の夜  
 二百 白旗を立て揃へたる雪の下  
 二百 紫の幕も間々あり江戸さくら  
 百七十 宮島や船と陸との月今宵  
 百八十 何ヶ国かけて営む橋供養  
 二百 名の付ぬ獣出たり西の狩  
 百八十 往来の盛る都の辻ヶ花  
 百八十 夫でこそ趣てけれ花の山  
 二百 桜見や爰にも一ツ破筵  
 二百加印 豊秋の顔見せなれや連歌□□  
 百八十 見物の多さや糸の渡りはな  
 百八十 菅笠や宮地も狭し伊勢の春  
 百八十 千金も散るやよしの桜見酒  
 二百 開帳の錦たれたり花の本  
 百八十 黒煙り立て空しき烽火台  
 百八十 加賀の原幾百万の蓑葉取り  
 二百 踏所是なし桜の山□ふり  
 百八十 幕申の打所なき城の桜  
 二百 祇園会や海なき山に袖の浪

卷頭 桃灯

二百 夕顔も見へぬ五条の夕涼  
 二百 小松野や□□袂ト引て見る  
 二百 雨乞や神泉苑の一ト黒ミ  
 百八十 石山に余りて出たる勢田の月  
 二百加印 月の影地にも洩さぬ須摩明石  
 百八十 ねり物の菓子も売切る祇園の会  
 二百 春風や諷ふ野もあり山もあり  
 百八十 かけ声のをとらぬ袖をくらべ馬  
 二百加印 桜見にあたり○音は味噌になり  
 手に 受て 見る くく  
 二百加印 笑ひ合ひけり鉤唇干シ睦  
 百八十 小式部か奇骨あると誉にけり  
 二百 可愛□花に□浮く菊の露  
 二百 解し扇て取るや春の雪  
 二百 ぬしはたれ木わたに□□し馬の鞭  
 百八十 調文の筆出来し花に蝶  
 二百 仙境の雪芝を柚か搜し出し  
 二百 薬毒の草の吟味や□□  
 百八十 猿蓑を借てよみけり五月雨  
 二百加印 □ひの文ミ読む水亭の釣灯籠  
 二百加印 下戸さへも好し水晶の小盃

ㄥ  
(5・オ)

ㄥ  
(6・オ)

ㄥ  
(ウ)

案し直してく

百七十 後の世の間に鵜飼は捨小船

百七十 鯛売も口を替たり桜売り

百五十 憲清は栄花のにしき墨に染め

二百 諫言に国傾かぬ城の月

二百 踏迷ふ闇路もはる、曲輪の月

百八十 牛飼牛飼か耳を洗ふて河鹿聞

百四十一 人質を戻す和睦のすみ衣

二百 曲輪の闇をはなれて見るや海の月

百八十一 樽肴六かし桜に瓢酒口

二百 猿蓑サルに魂の入りし濡れ男ヲトコ

二百 捨る子を抱アいて拝む灌仏会

二百 天神に通ハはす山の神祭り

二百 なき時は花の遠目も一風雅風ヒヒ

二百 神鏡に向た嫉妬の身を磨キ

二百 鵜飼火の罪消すすみの衣かへ

二百 去状を書いて引さく天赦日

二百 照射するよを寐にけり書八閨

二百 虫鳴くや問ひ来る仏身の懺悔

二百 天神を身請の金で宮普請

二百 筆の首取て戦口めけり

二百 再縁や元トの梢に帰り花

二百 諫言の口か聞たる曲輪のやみ

百八十 待状や橋に名馬の足を止め

持於古者

百七十 二度の世見直す源氏垣

百八十 月蝕晴る、国栖か舟

百六十 穴賢口口た平家蟹

百七十 雪にたわみし古板屋

百八十 嵐雪寐せぬ花の陣

百六十 腰打れ延る姥さくら

百六十 遷座の重く石仏

百七十 所帯を開らく桜売り

二百 櫓も目覚す明ケの陳

百六十 高飛さする相馬公家

百七十 露膏よとて萩の酔

百八十 霜に口れ行目黒道

二百 虎杖枯る、土籠

百八十 酔の涅槃に水祭り

百口十 白旗あくる鬪體

二百三 鉢の口口立口る地

四方八面人の口口がり

レ (3・オ)

レ (ウ)

レ (ウ)

レ (4・オ)

レ (ウ)

卷頭  
卷頭  
卷頭

弘化四年未初秋

俳諧

分樂

思ひの

儘に

出来

上り

けり

二百五

花花よりも望ノソむ姿や種子瓢ヒヒ

エ登

百七十

面白ふ打開きたる花畠

エ薫風

二百

豊年や稲に目覚る百舌鳥の声

エ風笑

二百

三階の成就や四方あきの月

エ風笑

百八十

木像やもの言手と生ヒキヒ

エ風笑

百七十

雨風にあは津の里の裸麦

エ風笑

百八十

句作や寂□□のみの秋の坊

エ風笑

百七十

叡慮にも叶ふ女筆の雪の富士

エ風笑

二百

撰集に入る難題の山の月

エ風笑

二百加印

水様の月□淀の酒に浮き

エ風笑

百八十

稲夫□の光るよふらん寄進太刀

エ風笑

百七十

絵図形りに月満ツ汐や浜御殿

エ風笑

百八十

仙薬日一ツ不足よ阿房宮

エ風笑

二百十五

王戎か撫ルる五才の仕立馬

エ風笑

二百

義貞も笑む新田の早稲の餅

エ風笑

二百加印

雛形に違はぬ桃の花の縫

エ風笑

百八十

伊丹屋の酒に吟味の火も入らず

エ風笑

二百

幾年の古未進帳も□□の秋イヌ

エ風笑

二百

去年の雪ほとに積たり麦俵

エ風笑

二百

五器一具桜に事足る四疊半

エ風笑

百七十

師の像を刻む手にはの花筐

エ風笑

ㄥ(裏)

ㄥ(表紙)

ㄥ(2・オ)

ㄥ(ウ)

(1・オ)

各句の上に「百七十」「百五十」「百八十」などあるのは、それぞれの句の得た点を示しているであろう。中には「二百加印」としたものもある。本来ならば種々の点印を用いるところであるが、何かの都合でそうした点印の使用が出来なかったものと思われる。

次に本集の四句目から九句目にかけて、「独眠・曾蘭・登・薰風・風笑」と下に記されているのは、その句の作者名であろう。その他の句は誰の作かは明らかでない。表紙の「分楽」は句の作者というより恐らくこの催し主と思われる。また、作者名に「川」「エ」と肩書するのは、その住地の略称ではなからうか。あるいは「川」は「川辺」、「エ」は「穎娃」かも知れない。

なお、下に「巻頭」と記したものが

酔の涅槃に水祭り

白旗あくる鬪體

祇園会や海なき山に袖の浪

蚊遣火を読むや芳機か筆の跡

など集中に四句あり、雑俳の催しの折りに巻頭を占めた句であろう。それから「焼灯」とした句が一句あるが（踏所是なし桜の山□ふり）、これは何を意味するか、よく分からない。

本集は全般的に虫害がひどく、そのため解説の出来ない箇所を多く残した。

## 翻 刻

### 凡 例

本文は、原本を忠実に翻刻することを旨としたが、便宜左の要領に従った。

- (1) 文字はおおむね現行通用のものによった。
- (2) 清濁、仮名遣いは原本通りである。
- (3) 丁移りは(オ)で示した。
- (4) 虫食いによる不明文字は□にした。

(以上)

(大内 初夫)

雜俳集『弘化四年未初秋 俳諧』

南九州の国文学関係資料

橋口晋作  
大内初夫



解説

○『弘化四年未初秋 俳諧』

大本・写一冊（川辺中央公民館蔵）。

原本は鹿児島県川辺町川辺中央公民館の所蔵で、橋口晋作氏の発見にかかわる。初めに書誌的なことを記せば、袋綴じ一冊（26×18.8）十丁。表紙は共紙に、右から「弘化四年未初秋／俳諧／分樂」とある。各丁片面九行。

表紙には「俳諧」とあるが、これまで本年報にしばしば紹介して来た、薩摩・大隅地方に盛んであった雑俳集であることは内容からも明らかであって、付句の題として

- ① 思ひの儘に出来上りけり
  - ② 案し直して〜
  - ③ 持於古者
  - ④ 四方八面人の□□がり
  - ⑤ 手に受て見る〜
  - ⑥ 曲りけり
  - ⑦ 思はぬ人に廻り合けり
- の七つの前句付と冠付の題を書中に見出せる。句はこれらに付けたもので、①が27句、②が23句、③が16句、④が30句、⑤が15句、⑥が16句、⑦が1句、で全部の付句数は一二八句である。